第二話　撤収

「あーああ、今日もだるい」人差し指が言った。
「肌がカサカサになっちゃう」親指は顔じゅうにハンドクリームを塗りたくった。
　銀行員の親指は毎日お金を数えるために手の水分が奪われてしまうのだ。
　そして先ほど今日もだるいと言っていた人差し指は、基本的にボタン的なものを押すのが主な仕事だが、親指と共同で書記の仕事もかけ持っている。他にもあらゆる作業でオールマイティに仕事をこなし、親指とツートップで仕事を任されている。さらに最近ではボタン的なものだけでなく、タッチパネル的なものを押す仕事がなぜか激増し、そのせいで人差し指の仕事は激務となっている。
　中指はパソコン操作の際には活躍を見せるが今は眠っている。昼の休憩だ。
　薬指には糊のカスが乾燥してこびりついている。
「どうしてちゃんと手を洗ってくれないんだろう」
　薬指は神経質なのだ。土木関係を担う薬指は、ツートップを温存するためにチューブから出された糊をのりしろに広げる役目を任されている。神経質の割には、薬指はこの仕事が気に入っている。しかし糊を貼り終わった直後に指同士でごしごしこすり合わせられるのは気に入らないらしい。本当は石鹸できれいに洗ってほしいと思っているのだった。
　小指は一見弱そうに見えるが、担当は運送業務だ。物を持つときに小指の支えがないと、安定しないため、親指が激怒する。
　しかし運送業務とは言っても、それは小包担当で、大物を運ぶには、足の指たちの力を借りなければならない。小さな靴の中で外反母趾になりかけながら、足の指たちは頑張っている。仕事のあるところまで、皆を移動させるバスの運転手的役割も果たしている。

　昼の休憩が終わった。仕事の再開だ。

　足の指が皆を運ぶ。ほら、右に仕事あり、左に仕事あり。前方に障害物あり。右にカーブ、左にカーブ、立ち止まってまた急発進。キュキュッと靴が鳴る。
　前方に重いもの発見。全員でそれを持ち上げる。この時ばかりは、中指も休んでいられない。ふんっと食い込むビニールひもに負けないようにお腹に力を入れる。親指はちらっと小指の方を見る。小指は真面目に支えている。物を置くと、ふーっとみんな息を吐く。ようやく血が巡ってくる。一休みする間もなく、次の仕事が待っている。
　次はあっち、次はこっち。そしてみんな全速力で仕事をやっつける。どんどんどんどんどんどん
　その時だった。

「ひゃーーーーーーーーー」と膝が悲鳴を上げた。
「いたい、いたい、いたい」

皆びっくり。こんなことは今までなかったのだから。

それを聞いた肘が「てっしゅーーーーーーーーーーーーう」と叫んだ。
皆一斉に仕事から手を引いた。

【2016-05-16】指さし小説　第二話

http://p.booklog.jp/book/106963

第二話もなぜかハードなタイトルに…。平和主義なのに…。
撤収ということばは、退却を遠回しに言う時にも使うみたいです。なんか人間くさいですね。
負けを認めないという。でも今回は潔い感じにしたかったので、肘に言ってもらいました。肘が撤収すれば、自動的に手の指達も撤収しちゃいますからね。
私も膝痛もちなので、明日からまじめに体操します。

著者：かっこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/106963

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/106963

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ